俳句

亘理寒太（わたり かんた）

周南市

（1895～1963）

亘理寒太（本名、正）は、徳山中学時代から短歌誌や文芸誌に投稿、入選。三高在学中に作家を志し、中戸川吉二らの第五次『新思潮』の同人として小説や詩を書く。尾道中学教師時代に自由律俳句『層雲』に投句、山頭火を迎える。その後一時句作を停止後、松野自得の『さいかち』に定型俳人として再出発。戦後八代（周南市）に帰郷後は、村に文化の灯をと、群鶴句会を主宰し、八代の鶴の句を通じて全国に発信し、多くの俳人を迎えた。「ツルの俳人」として誰からも愛された寒太は、俳句を人温と風光の文学ととらえ生涯を楽しく生きた。

（田村悌夫）

【主な著作】

句集『群鶴』（亘理寒太句集刊行会、昭和39年）